大勲位に20年超仕えてきた「現職議員」が綴った「人生&政治」論

「戦後を生き抜いた最後の政治家」中曽根康弘元総理の危機管理

安倍総理と同じ「保守政治家」にして「改憲論者」であった中曽根元総理。だが、靖国参拝をめぐる外交ひとつをとってみても、その手法は大いに異なる。5年に及んだ長期政権を築いた大勲位と、安倍首相の違いに迫った！

田中茂議員と大勲位

「中曽根内閣は戦後歴代内閣で、もっとも危機管理に長けた内閣でした。'95年の阪神・淡路大震災、そして'11年の東日本大震災時には、〝中曽根総理、後藤田官房長官のコンビだったら…〟とはよく言われたものです」

中曽根康弘元総理大臣。96歳。同氏の秘書を20年以上にわたって務め、「大勲位」の危機対応を目のあたりにしてきた、田中茂みんなの党参議院議員（56）が言う。「その中曽根が、危機管理の第一に挙げたのが〝初動の早さ〟です。阪神・淡路大震災で村山富市首相はテレビニュースで地震を知り、官邸に駆けつけたという。情報が首相に入らない時点で致命的です。さらに自衛隊の投入が大幅に遅れた。東日本大震災での菅直人首相も同じです。自らヘリコプターで福島第1原発に駆けつけることがリーダーとしてやることなのか。緊急時に国の指揮を誰が執るのか、理解していたとは思えません」。

中曽根、後藤田正晴官房長官コンビの「初動の早さ」を物語るのが'86年に起きた伊豆大島の三原山大噴火だ。

11月21日16時15分。三原山は大噴火を起こし、噴煙は8千㍍に達していた。そして18時にはマグマが噴き出し、山を下りはじめた。対応を誤れば伊豆大島の島民が火砕流にのまれてしまう。

「そんな状況でも、当時災害の担当庁だった国土庁は会議のための会議に終始し、対策を打ち出せなかった。そこで中曽根は、官邸主導で後藤田官房長官をトップに国土庁に対策本部を作ったのです」

中曽根は首相権限で39隻の自衛艦を含む島民救出船団を派遣。噴火からわずか13時間40分で、島民1万人、観光客3千人の全島避難を完了させたのだ。「沖に自衛艦の姿が見えたときは、これで助かったと思った」とは、避難した島民の声だ。自衛艦まで派遣したことは後に野党から追及された。だが、「初動の早さ」を実践した危機管理は、戦後日本史上でまれに見る成功例としていまも語り継がれている。

初動の重要性は政権運営においても同様だ。「（総理は）就任早々のスタートダッシュが大切」というのが中曽根の持論。'82年、中曽根政権がスタートしたとき、日韓、日米関係は戦後最悪といっていい状況だった。

「前政権の鈴木善幸内閣で、園田直外相が円借款を求める韓国に対し、〝韓国では嫌いな相手からカネを借りたり、技術を教えてもらう社会習慣でもあるのか？〟と公式の場で発言。さらに、鈴木善幸首相が〝日米同盟は軍事同盟ではない〟と発言し、日米関係もギクシャクしていた」

中曽根は就任早々、米国より先に韓

'83年、米国でのウィリアムズバーグ・サミットにて

のちに初動の遅れを後悔したという村山氏

事故当初、菅氏は自ら現場に（当時の内閣広報室提供）

中曽根元首相にインタビューする田中茂参院議員。田中氏は、米国クレイトン大学教養学部政治学科卒業。広告代理店・東急エージェンシーを経て、'87年に中曽根事務所に入所。以後、20年以上にわたり秘書を務めた

〝中曽根康弘を最もよく知る最後の秘書〟といわれる田中氏が「人生の危機管理術」までを書き尽くした『100歳へ！ 中曽根康弘「長寿の秘訣」』（光文社）は好評発売中。大勲位の健康法も詳述されている

国の全斗煥（チョンドゥファン）大統領に電話。訪米の直前に韓国を訪問し、日韓関係を修復した。と同時に、防衛費の増加、対米武器技術供与という〝おみやげ〟を手に訪米。レーガン大統領との会談は成功し、日米関係修復にも成功した。

「レーガン大統領と中曽根の『ロン・ヤス関係』はきわめて丁寧な外交の積み重ねで築き上げられました。初訪米で中曽根は、ウィリアムズバーグ・サミットでの立ち回りを綿密に打ち合わせ、サミットを成功に終わらせたのです」

議長国だった米国の面子は保たれた。レーガンはサミット終了時の記念撮影時、中曽根の手を引き隣に座らせた。以後、「ロン・ヤス」は、戦後日米外交史上、もっとも良好な関係を持続していく。

安倍首相に捧げる中曽根の「外交4原則」

初動だけではない。中曽根が危機管理上、重要視したのが「柔軟性」だ。

その象徴が、靖国参拝だった。'85年、歴代総理として初めて終戦記念日に靖国神社に公式参拝。だが、その翌年、A級戦犯の合祀問題が浮上すると、中曽根は即座に、靖国参拝を取りやめた。

「当時、中曽根は〝風見鶏〟と揶揄されたが、〝定見のある風見鶏は悪くない〟と意に介さなかった。中曽根は、けっして二国間だけで外交を考えない。その裏にある国際情勢を念頭に置いていた。当時、市場経済化に踏みだした中国を西側陣営に引き込むことが戦略上重要だった。靖国参拝をすれば、良好な関係を築いていた胡耀邦（フヤオバン）総書記が国内政治上危機に陥るかもしれない。ならば靖国参拝はしない、というのが中曽根の判断でした。さまざまな議論がある靖国参拝を自民党総裁選の選挙公約として掲げる意図がよくわかりません。首相としての選択肢をせばめてしまうものですから」

中曽根がいまでも抱く「外交の4原則」というものがある。

1　国力以上の対外活動をしてはならない

2　外交はギャンブルであってはならない

3　内政と外交を混交してはならない

4　世界史の正当的潮流を外れてはならない

現在の安倍首相が、そして各国リーダーが耳を傾けるべきだろう。

韓国、中国に歩み寄ったからこそ生まれた最良の日米関係。安倍政権が「中曽根外交」から学ぶべき点は多い。

「中曽根は〝総理の一念は狂気であり、権力は魔性である〟と、権力が持つ恐ろしさを実感していた。魔性にとりつかれ、独断に陥る自分を戒めるために、あえて、自派ではなく、最大派閥の田中派に属した後藤田氏を官房長官に据えた。当時、〝中曽根が田中の軍門に降った〟と報道されましたがね。中曽根の謙虚さが、戦後稀有な危機管理能力を備えた政権を作りだした。後藤田氏は、中曽根のことを嫌いだった。でも、政権が終わった後〝あんな立派な総理はいない〟と語っていましたよ」

権力への謙虚さ、反対意見を取り入れる懐の深さが、5年に及ぶ長期政権につながった。高支持率を誇る安倍首相だが、権力の魔性にとらわれず、長期政権を築けるのか。

写真・共同通信、田中茂事務所提供